

モラヴィア兄弟団の管楽アンサンブルについての一考察

(音楽講座管楽器研究室) 市川克明

The Wind Ensemble in the US Moravian Community

Katsuaki ICHIKAWA

(平成 27 年 7 月 6 日受理)

はじめに

18 世紀から 19 世紀にかけて、北アメリカのいわゆる「移住の時代」に、音楽分野において **Moravians** モラヴィア兄弟団は重要な役割を果たした。その中で、ヨーロッパのドイツ語圏から派遣された兄弟団信徒の音楽家たちは新大陸の入植地においても礼拝や演奏会で指導的役割を演じ、その音楽活動を豊かなものとした。

Herrnhuter 「ヘルンフート兄弟団」¹、*Böhmische Brüder* 「ボヘミア兄弟団」あるいは *Moravians* 「モラヴィア兄弟団」² という用語はしばしば同義語として用いられることがあるが、本稿では、ヨーロッパ中部の、あるいはドイツ語圏の信徒たちを「ボヘミア兄弟団」、北アメリカ大陸北東部入植地の信徒たちを「モラヴィア兄弟団」と区別して用いる。

18 世紀末から 1820 年頃にかけて、北アメリカ北東部のモラヴィア兄弟団の移住地域では、宗教音楽はもとより、世俗音楽も盛んに演奏され、特に管楽アンサンブルの一種である *Harmoniemusik* ハルモニウムジークが非常に好まれた。入植初期はヨーロッパから持ち込まれた作品、あるいはモラヴィア兄弟団に所属する音楽家たちによる作品が演奏されたが、後には同団信徒であるアメリカ出身の音楽家の楽曲も頻繁に取り上げられるようになった。

本稿では、19 世紀前半におけるペンシルヴァニアとノース・カロライナのモラヴィア兄弟団のハルモニウムジークとその演奏に関して考察する。また、その中で特

に重要な役割を果たした David Moritz Michael ダヴィッド・モーリツ・ミヒャエル (1751-1827) について、さらにモラヴィア兄弟団の *Collegium musicum* コレギウム・ムジクムが所蔵していた Antonio Rosetti アントニオ・ロゼッティ (ca. 1750-1792)³ のハルモニウムジークを研究対象とする。

1. 北アメリカにおける **Moravians** モラヴィア兄弟団と音楽

ボヘミア・モラヴィア兄弟団の起源である *Unitas Fratrum* ウニタス・フラトルム⁴ は、1457 年、モラヴィアに程近い、ボヘミア北東部の Kunvald クンヴァルトで Jan Hus ヤン・フス (1369-1415) の教義を信奉する信徒たちにより組織された。その後、ルター派とも密接な関係を持ちつつ不安定ながらもボヘミア、モラヴィア、ポーランドで存続したが、1618 年のプラハ城内での神聖ローマ帝国国王顧問官 2 名と書記の 3 名が城の 3 階の窓から投げ落とされる事件をきっかけとして始まった 30 年戦争により、帝国領内の多くは荒廃し、ボヘミア兄弟団とその文化も同様にほとんど壊滅状態に陥った。また、1620 年のヴィラーホラ (白山) の戦い以降、ハプスブルク家の支配下におかれたボヘミア・モラヴィア地方では、信徒は地下に潜伏することを余儀なくされた。1648 年のヴェストファーレンの和議以後、同地は引き続きローマカトリックの支配下におかれ、兄弟団に対しての弾圧が

継続され多くの信徒は故国を去った。

1722年、Nikolaus Ludwig von Zinzendorf ニコラウス・ルートヴィヒ・ツィンツェンドルフ伯爵（1700-1760）の庇護のもと、ボヘミア兄弟団により Herrnhut ヘルンフートと称される共同体が建設された⁵。これにより教団は再組織され、復興することになった。それに伴い、礼拝、同教団特有の Liebesmahl 愛餐、Singstunde 賛美の時間など日々の活動、また特別な祝祭日などで音楽は重要な役割を果たした。同時に、世俗音楽も頻繁に演奏され、ヴァイオリン、フルート、ホルン、トロンボーンなどが用いられた⁶。例えば、1731年にコレギウム・ムジクム⁷でホルンが演奏されたとの記録が残されている⁸。ところで、すでにヘルンフートの共同体設立直後から、様々な国々への布教活動が行われており、その目的地は東・南アフリカ、グリーンランド、さらにカリブ地域、北アメリカにまで及んだ。北アメリカにおいては、1735年、ジョージアに入植したが、対スペイン戦争により建設直後の町を追われ、その結果、新しい入植地をペンシルヴァニアに求め、1741年、Bethlehem ベスレヘムを建設したのであった⁹。その後、この町を拠点とし、ペンシルヴァニアの Nazareth ナザレス（1740年）、同じく Lititz リティツ（1756年）、ノース・カロライナの Salem セーラム¹⁰（1766年）など、新たな入植地を建設した¹¹。

これらの兄弟団信徒は、キリスト教の伝統に加え、その豊かな音楽文化をも持ち込んだ。初期には、ヘルンフートと同様に、賛美歌の伴奏として、ヴァイオリン、フルート、ホルン、トランペットなどが用いられたが、しばらくした後、教会にはオルガンも設置され、男性信徒によりコレギウム・ムジクムが設立された。そこでは、教会音楽に加え、管弦楽、室内楽などの世俗音楽も演奏され、Carl Philipp Emanuel Bach カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ（1714-1788）、Johann Friedrich Reichardt ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルト（1752-1814）などドイツ人作曲家の作品や、モラヴィア兄弟団信徒である Christian Gregor クリスティアン・グレゴール（1723-1801）、Johannes Herbst ヨハネス・ヘルプスト（1735-1812）、John Antes ジョン・アンテス（1740-1811）、Johann Friedrich Peter ヨハン・フリードリヒ・ペーター（1746-1813）、Johann

Christiann Bechler ヨハン・クリストフ・ベヒラー（1784-1857）、およびダヴィッド・モーリツ・ミヒャエルらの楽曲が取り上げられた。現在、これらの楽譜はウィンストン＝セーラムのモラヴィア音楽財団 *Moravian Music Foundation*¹²、およびベスレヘムのモラヴィア教会音楽公文書館 *Archives of the Moravian Church*¹³ に保管されている。全体では10000曲にもものぼり、うち約7000曲がモラヴィア兄弟団に属する作曲家によるもので、残りの多くはヨーロッパから伝えられた楽譜である。セーラムのモラヴィア音楽財団には、本来コレギウム・ムジクム所蔵であった580曲以上もの管楽および声楽作品が伝えられている。ベスレヘムのモラヴィア教会音楽公文書館にも同様にベスレヘム・コレギウム・ムジクム伝承のものが900曲以上、リティツ・コレギウム・ムジクム伝承の管楽・声楽作品が300曲以上所蔵されている¹⁴。これらセーラムやベスレヘムの筆写譜資料はよく整理されており、その出処起源も明確に記載されている例も数多く、非常に豊かな楽譜財産として現存している。

2. Collegium musicum と管楽アンサンブル

Collegium musicum コレギウム・ムジクムは16世紀のドイツ語圏で生まれた用語で、音楽分野に関して、美学的な研究よりも特に専門的な演奏実践研究に特化した組織を意味する¹⁵。17世紀にはチューリヒ、プラハ、ライプツィヒ、ハレ、イエナ、ブレーメンを始めいくつかの町に大学所属のコレギウム・ムジクムと称される著名な団体が存在した¹⁶。モラヴィア兄弟団信徒は入植地において、本国と同様に、コレギウム・ムジクムを設立し、移住の際、多くの楽器や楽譜を持ち込んだ。

ベスレヘムでは早くも町の建設の3年後、すなわち1744年にはドイツ生まれの音楽家 Johann Christopher Pyrlaeus ヨハン・クリストファー・ピュルラエウス（1713-1785）によりコレギウム・ムジクムが設立され、そこでは楽器の訓練や兄弟団内の教会音楽の向上に寄与した¹⁷。その後、18世紀中頃にはリティツ、ナザレス、セーラムなどでも相次いで同様の団体が設立された。演奏されるレパートリーとして、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ、Johann Christian Bach ヨハン・クリスティアン・バッハ（1735-1782）、Johann Adolph Hasse ヨハン・アドルフ・ハッセ（1699-1783）、Carl

Stamitz カール・シュターミッツ (1745-1801)、また Joseph Haydn ヨーゼフ・ハイドン (1732-1809) らの作品も記録されており、それらはヨーロッパから持ち込まれたものであった¹⁸。これらのコレギウム・ムジクムでは、19世紀の初めには管楽器を含む3重奏から10重奏の室内楽が演奏された記録があり、とりわけ、それぞれ2本からなるクラリネット、ホルン、ファゴットの6重奏が好まれた。これらの音楽は、室内、あるいは屋外でも演奏され、特にこの2本ずつの編成のハルモニウムジークの需要が高まり、ダヴィッド・モーリツ・ミヒャエルやヨハン・クリスティアン・ベヒラーらに刺激を与え、数々の作品を生み出されるきっかけとなったのである。ナザレスにおける19世紀前半の演奏会の記録、*"Verzeichniss derer Musicalien welche in Concert sind gemacht worden, Nazareth den 14t Octbr 1796 und zum 30 Janry 1845"*¹⁹ は、同地におけるコレギウム・ムジクムの活発な演奏活動の様子を伝えており、そこには約50年にわたる演奏曲目が詳細に記録されている。

ところで、コレギウム・ムジクムの楽器編成はどのようなものであったのだろうか。ベスレヘム・コレギウム・ムジクムが1780年に行った最初の管弦楽演奏におけるメンバーリストによれば、第1ヴァイオリン2名、第2ヴァイオリン2名、ヴィオラ1名、チェロ2名、フルート、オーボエ、ホルン、トランペット、がそれぞれ2名ずつ記録され、総勢15名である²⁰。また、ハイドンのオラトリオ「天地創造」が演奏された1811年ごろには、第1ヴァイオリン2名、第2ヴァイオリン2名、ヴィオラ1名、チェロ1名、コントラバス1名、フルート2名、オーボエ1名、ホルン2名、トランペット1名に加え、注目すべきことに1名ずつクラリネット奏者とファゴット奏者が記録されている²¹。編成としては十分ではないにせよ、基本的な古典派オーケストラの楽器編成を踏襲している。

ベスレヘムにおいては、19世紀前半、コルネットとチューバによるアンサンブル *Sextett Culb*、軍楽隊、オーケストラである *Columbian Band* などが存在し、それぞれの音楽活動が広く行われていた²²。とりわけ、コレギウム・ムジクムの他に勝る活発な活動は特筆に値し、ダーヴィッド・モーリツ・ミヒャエルが率いていた時代に最盛期を迎えた。しかし、彼がドイツへ帰国した後、す

なわち1815年以降、ベスレヘム・コレギウム・ムジクムでの演奏会の数は激減した。実際、ミヒャエル着任以前の1807年は17回、1809年は36回、1813年は24回であった演奏回数が、彼の去った1815年、1819年には年12回にとどまっている²³。

その後、演奏会の再興をめざし、1820年12月20日に *Philharmonic Society of Bethlehem* ベスレヘム・フィルハーモニック協会が組織され、「構成員は、協会費として年50セントを、また、リハーサルを欠席した場合には12.5セントを罰金として支払うという義務を負うことに同意した」、というような様々な規約が定められた²⁴。この再編成の後、再び演奏活動は活発となり、ミヒャエルが活動していた頃に匹敵する演奏会の回数を回復した²⁵。また、コレギウム・ムジクム所蔵の楽譜もベスレヘム・フィルハーモニック協会が引き継ぐことになった。

3. ダーヴィッド・モーリツ・ミヒャエル

1795年、ドイツ生まれのボヘミア兄弟団信徒であるダーヴィッド・モーリツ・ミヒャエルがナザレスで活動を始めるが、これ以降、モラヴィア兄弟団、あるいはコレギウム・ムジクムの活動は新しい局面を迎えた。才能ある音楽家でありまた音楽教育者であった彼は、精力的に演奏会を企画し、その中で移住の際に持ち込んだと思われる作品の数々を紹介した。とりわけ、器楽作品、シンフォニー、コンチェルト、管楽アンサンブルは広く取り上げられた。

ミヒャエルはエアフルト近郊の Kühnhausen キューンハウゼンで生まれ、エアフルトで教育を受けた後、1781年、まずボヘミア兄弟団の入殖地の一つであるエルベ川沿いの Barby バルビーへ写譜係として、2年後には Niesky ニースキーへ音楽教育者として赴任し、後に、教会付属学校の校長に任命された。1795年、アメリカの新入殖地赴任の命を受け、ナザレスに移住した。彼は、最初は週1回、のちに週2回の演奏会を企画し、自らもクラリネット奏者として参加した。1804年、彼はナザレスの教団管区監督となった。その4年後、ミヒャエルは、当時最も大きな入殖地の一つであったベスレヘムに移り、それまでと同じく演奏会、および音楽教育に携わることになった。1811年、ベスレヘム・コレギウム・ムジクムはヨーゼフ・ハイドンのオラトリオ「天地創造」を上演

し、その際、ミヒャエルが指揮を担当した。これは「天地創造」のアメリカ大陸での初演であり²⁶、アメリカ東部での音楽活動に新しい刺激を与えた。1815年までベスレヘムに留まった後、彼はその後ドイツに戻り、1827年にコーブレンツ近郊の Neuwied ノイヴィードで亡くなった。

作曲家としては、多くの聖歌や礼拝のための合唱曲を残したが、特筆すべきなのは14曲のParthia パルティアと2つの組曲 *Die Wasserfahrt*、*Bey Einer Quelle Zu Blasen* のハルモニウムジークである。これらの作品は明朗快活でどれもユーモアと機知にあふれているが、演奏技術的には、時として困難な箇所も見受けられる。パルティアは、2本ずつのクラリネット、ホルン、ファゴットの6重奏であり、曲によっては、フルート1本あるいはトランペット1本が加えられる。トランペットが用いられている場合、演奏される音は自然倍音に限られ、ほとんどはファンファーレ音型である。また、フルートは第1クラリネットの1オクターブ上をユニゾンで演奏するなど、主旋律の補強としての役割に限られる。また、18世紀からの伝統であるディヴェルティメント、セレナーデの様式を持ち、和声、旋律、様式、形式とも古典派のそれを踏襲しており、ヨーロッパのロマン派的作法を見出すことはできない。和声的にも旋律的にも伝統的な枠内に収まり、典型的なこの時代のドイツ風管楽アンサンブルであると言える²⁷。

これらの音楽は、演奏会でのレパートリーとしてのみならず、ベスレヘムやナザレスの教会でタベの音楽としても演奏された。ところで、16の管楽アンサンブル作品のうち7曲のみ、すなわち2曲の組曲とパルティア第1、2、4、5、9番が写譜されセーラムに送られたことは明らかで、記録によれば、セーラムではミヒャエルの管楽作品が頻繁に演奏されている²⁸。

組曲 *Die Wasserfahrt* は15楽章と番号2つの無しの楽章から、*Bey Einer Quelle Zu Blasen* は3部分総計14曲の短い楽章から構成され、いずれも30分程度の作品である。彼の管楽作品で最も有名である組曲 *Die Wasserfahrt*²⁹ は1809年に作曲され、ベスレヘムでのWhit-Monday³⁰ における伝統的な娯楽行事である *Die Wasserfahrth* あるいは *Boat Ride* の際に演奏された³¹。この慣習は、住民たちがリーハイ川の川岸を散歩しながら

ら、川の上に浮かんだ平底の船の上で演奏される音楽家たちの演奏を聴く、というもので、ミヒャエル自身も第2クラリネット奏者として演奏に加わっていた³²。全体的には明るく快活で、概して第1クラリネットが旋律を受け持ち、ホルンは基本的には和音の充填を担当し、時として伴奏なしで2本のホルンはホルン5度を用いた旋律を演奏する。ファゴットは第11曲の中間部のように短いメロディを担当することはあるにせよ、全曲を通じバスパートとして全体を支える役目を担う。第6曲は快活なジークのようなテーマに続き、後半はモラヴィア兄弟団の聖歌を思わせる重厚内省的な部分が続く印象深い楽章である。また、第12曲と第13曲の間には *Allegretto* 楽章が挟まれ、ここではホルンの2重奏、および独奏ファンファーレが演奏され、曲の最終部分の前の導入として効果をあげている。このようにはっきりと他部分とは明白に異なる楽章を挟み単調さを避けている。また、最終楽章は *Choral-mäßig* 「コラール風に」と記されており、これも聖歌を思わせる印象的な楽曲である。Wolfgang Amadeus Mozart ヴァルダング・アマデウス・モーツァルト (1756-1791) の歌劇「魔笛」の第2幕の冒頭 *Marsch der Priester* 「修道士たちの行進」を思い起こさせる。

組曲 *Bey Einer Quelle Zu Blasen* は、組曲 *Die Wasserfahrt* 同様、Whit-Monday の際の船上での演奏のために作曲され、おそらくは組曲 *Die Wasserfahrt* の翌年、1810年に作曲された。3部分はほぼ同等の規模と構成を持ち、それぞれは4楽章からなる。冒頭は *Introductio* 序奏と表記されており、また「この楽章は3回演奏される。1. ホルンのみで、2. ホルンとファゴットで、3. ホルン、ファゴット、クラリネットで」と特記されている。全体的な構成と曲想は組曲 *Die Wasserfahrt* に類似しているが、野外での演奏を念頭に置いたトゥッティあるいはファンファーレ風の部分が多い快活で楽しげな楽章がほとんどで、静かで内省的な部分は少ない。なお、これら2曲はベスレヘムのみならず他の兄弟団入植地でも好んで演奏された³³。

14曲のパルティアも基本的には2曲の組曲と同じ色彩を持った作品であるが、ほとんどは急-緩-急の3楽章形式、あるいはそれにメヌエット楽章が挟まれた4楽章、あるいは5楽章形式からなる短い楽曲である。パルティ

ア第1番の第1曲の主旋律は、出処不明ではあるが、1849年の Giacomo Meyerbeer ジャコモ・マイアベーア (1791-1864) 歌劇 *Le Prophète* 「預言者」の中の行進曲でも用いられている³⁴。第2番は第4楽章 *Allegro* の後、短い *Presto* が付け加えられ、第6番は5楽章形式で、冒頭に緩徐楽章が置かれている。また、常にクラリネットが主旋律、ホルンは和声の補強およびファンファーレ風のパッセージ、ファゴットは低音楽器として和声的に支える、という作曲法は組曲よりも徹底している。概して、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、アントニオ・ロゼッティ、František Vincenc Kramář フランツ・クロンマーことフランティシェク・ヴィンツェンツ・クラマージュ (1759-1831)、Josef Reicha ヨーゼフ・ライヒャ (1752-1795) らのハルモニウムジークよりは規模も小さく、また内容的にはより娯楽的要素が強い。

ミヒャエルの貢献によりアメリカにおける管楽アンサンブルは最盛期を迎えることになったのは疑いがない。特にナザレスとベスレヘムにおける活発な音楽活動を先導し、これは他の入植地のコレギウム・ムジクムを刺激し、その後のモラヴィア兄弟団たちの豊かな音楽活動の礎となり、同時代および次世代の作曲家、演奏家に多大な影響を与えた。

4. ナザレス、ベスレヘム、リティツ、セーラムにおける演奏会

1780年創立であるナザレスのコレギウム・ムジクムにおいて³⁵、1795年のダーヴィド・モーリツ・ミヒャエルの着任以降、音楽活動が非常に活性化したことはすでに述べた。彼が記録し始めたナザレスのコレギウム・ムジクムにおける演奏会のリスト “*Verzeichniss*” は1796年10月14日から1845年1月30日までの同地での演奏活動を伝える貴重な資料である。そのリストには様々なジャンルの作品が記録されているが、とりわけ目を引くのは管楽作品の多さである。管楽器のための協奏曲はもとより、室内楽、特に管楽アンサンブルが数多く含まれている。モラヴィア兄弟団メンバーは中央ヨーロッパの作曲家の作品、すなわちアントニオ・ロゼッティ、Václav Pichl ヴァーツラフ・ピヒル (1741-1805)、Vincenc Václav Mašek ヴィンツェンツ・ヴァーツラフ・マシェク (1755

-1831)、ヴォイチェフ・マチャーシュ・イーロヴェッツ Vojtěch Matyáš Jirovec (1763-1850)³⁶、ヨハン・クリスティアン・バッハ、Zimmermann ツィンマーマン³⁷、Collauf コラウフ (?-?)³⁸、Noak ノヴァーク (?-?)³⁹ らの管楽器作品を好み、ダーヴィド・ミヒャエル本人の作品も頻繁に取り上げられている⁴⁰。ロゼッティを除く上記の作曲家の楽曲の作品は、兄弟団入植地以外の北アメリカの都市ではほとんど知られてはいない⁴¹。

ミヒャエル本人は本来クラリネット奏者であったため、クラリネット協奏曲の演奏回数は群を抜いて多い。Ignaz Joseph Pleyel イグナツ・ヨーゼフ・プレイエル (1757-1831)、カール・シュターミッツ、ヴァーツラフ・ピヒルなど、様々なクラリネット協奏曲が演奏された記録が残されている⁴²。ミヒャエルがナザレスを去った後は、クラリネットを含む作品の演奏は、管楽アンサンブル作品に限られており、クラリネット協奏曲は含まれていないことから、クラリネット独奏作品は常にミヒャエルが担当したと推測できる。1800年を境に、クラリネット協奏曲の演奏回数は少なくなり、パルティアと題された管楽アンサンブル作品がその演奏の中心となっている。特に、ピヒルのパルティアはミヒャエルがナザレスを去る1808年の後まで好んで取り上げられており、“*Verzeichniss*” の中でも群を抜いて多く現れる。ミヒャエル自身の作品では、1798年3月16日のクラリネット協奏曲第3番の演奏以後、協奏曲、クラリネット2重奏、さらにパルティアも取り上げられており、ミヒャエルが去った後、度々彼のパルティアおよび *Die Wasserfahrt* が演奏された記録が残されている⁴³。

ベスレヘムにおいても、1744年のコレギウム・ムジクムの成立により、精力的に音楽演奏活動が行われていたが、1808年のダーヴィド・モーリツ・ミヒャエルの着任以降、さらに活発化した。特に、ミヒャエルの管楽パルティアは、夏の平日の夕方、兄弟団の集会所のバルコニーで住民たちへの娯楽として演奏された⁴⁴。

ベスレヘムから100キロ余りの場所に位置するリティツにおいても、1765年の創立以来コレギウム・ムジクムの音楽活動は活発であった⁴⁵。管弦楽作品、特にハルモニウムジークは非常に重要な位置を占めている。リティツにおけるクラリネットの導入はナザレスやベスレヘムよりも遅く19世紀初頭である⁴⁶。リティツ・コレギウ

ム・ムジクムに伝承されていた楽譜には、前述のナザレスの演奏会記録“*Verzeichniss*”にも現れた作曲家、ミヒャエル、ロゼッティ、ツインマーマン、コラウフ、ノヴァークなどのハルモニウムジークなどが含まれ、好んで演奏されていたと思われる。また、モラヴィア兄弟団の作曲家では、ヨハン・クリスティアン・ベヒラーのクラリネット、ホルン、ファゴットおよびトランペットを含むパルティア、および Peter Wolle ペーター・ヴォレ(1792- 1871)⁴⁷ の2本のクラリネット、2本のホルン、およびファゴット、フルート、トランペット各1本のための *Madison's March* が含まれている。コレギウム・ムジクムの後継団体である、*Lititz Philharmonic Society* リティツ音楽協会は1815年から1845年まで存在し、ハイドンのオラトリオ「天地創造」や「四季」を演奏したことで知られる⁴⁸。

ノース・カロライナのセーラムにおいても、かなり早い時期である1753年に、コレギウム・ムジクムが設立されている。1805年には規模が拡大され、同地におけるフルート以外の最初の本管楽器として2本のクラリネット、1本のファゴット、および2本のトランペットが導入されたことが確認できる⁴⁹。このトランペットは明らかにツィンク⁵⁰ で、モラヴィア地方ノイキルヒェンの楽器製造家ギュッターが1805年に製作したものである⁵¹。セーラムにおける詳細な演奏記録は残されていないが、例えば後に述べるアントニオ・ロゼッティのパルティアの筆写譜⁵² など多くの管楽アンサンブルが現存している⁵³。

5. リティツ・コレギウム・ムジクム所蔵のアントニオ・ロゼッティのパルティア

次に、19世紀前半のアメリカ北東部で比較的知られ、かつモラヴィア兄弟団入植地でその作品が頻繁に取り上げられたアントニオ・ロゼッティに関して論述する。アントニオ・ロゼッティは北ボヘミアの Litoměřice リトムエルジーツェ出身の18世紀後半の作曲家である。1773年以降、南ドイツのシュヴァーヴェン地方のエッティンゲン・ヴァラーシュタイン宮廷のコントラバス奏者、その後1785年からは音楽監督、1789年から亡くなる1792年まで北ドイツのメクレンブルク・シュヴェリーン宮廷の音楽監督を務めた。1780年代にはパリのコンセール・スピリチュエルおよびロージュ・オランピックの演奏会で

頻繁に彼の作品が取り上げられた。すでに存命中、交響曲や協奏曲はパリ、オッフエンバッハ、ヴィーン、シュパイアー、ベルリン、アムステルダム、マインツなどで出版され、ロンドンを始めとしてヨーロッパ諸都市において好んで彼の作品は取り上げられた。ロゼッティが故国でも評価されていたことは疑いなく、1791年12月5日ヴィーンで亡くなったモーツァルトのプラハの聖ミクラーシュ教会で行われた12月14日の追悼式において、ロゼッティが1776年に作曲したレクイエム RWV H15 が演奏された。その時の記録は、Heinrich Philipp Carl Bossler ハインリヒ・フィリップ・カール・ボスラー(1744-1812)により次のように伝えられている。「偉大な歌手ドゥセック夫人を始めとする120名の演奏家により」ロゼッティのレクイエムが演奏され、それを「モーツァルトの偉大な精神は楽士で喜んでにちがいない。」⁵⁴ 40数曲の交響曲を始めとし、多くの管楽器、およびヴァイオリン、ピアノのための協奏曲、室内楽曲、ピアノ曲、宗教曲、歌曲など、さらに22曲の管楽ハルモニウムジークが現存している。このハルモニウムジークのほとんどはパルティアと名付けられており、ドイツ、オーストリア、スイス、チェコ、ポーランド、さらにアメリカにもその筆写譜が伝承されている。この中でアメリカに現存する2曲のパルティアはいずれもモラヴィア兄弟団の入植地であるベスレヘムのモラヴィア教会音楽公文書館とセーラムのモラヴィア音楽財団の所蔵である。前述の通り、ロゼッティの作品はモラヴィア兄弟団に関係する演奏会のみならず、19世紀前半すでに北アメリカ東部の各都市で演奏されていた。ナザレスの演奏会では、ロゼッティのパルティアや協奏曲の演奏の記録が残っており、おそらくは、この時期にベスレヘムとセーラム伝承のパルティアも演奏されていたと推測できる。ナザレスでの演奏記録“*Verzeichniss*”の中には、1798年1月19日、1800年1月31日、1804年2月3日、1809年1月19日の4回、ロゼッティのパルティアが演奏されたことが記述されている⁵⁵。このうち、1798年以外は、単に *Parthia* としか記載されていない。1798年の記録では、*Parthia Nr. 1-3 in 6 Stimmen* とあり、6声のパルティアが3曲演奏されたことが確認できる。ダヴィッド・モーリツ・ミヒャエルがナザレスに到着したのが1795年、おそらくそれ以前にはクラリネットは使用されておらず、

クラリネットの入った管楽アンサンブルが演奏されていないこと、または演奏会記録をつけ始めたのが1796年11月であることを考え合わせると、ミヒヤエルが移住の際これらの曲を持ち込んだか、あるいはその直後に移住したモラヴィア兄弟団の音楽関係者が持ち込んだ、と推測できる。しかし、ロゼッティの「6声」のパルティアは現存するパルティア22曲のうち4曲のみで、編成は1本のオーボエ、2本のクラリネット、2本のホルン、1本のファゴットであり、ミヒヤエルが演奏したと思われる編成、すなわち2本ずつのクラリネット、ホルン、ファゴットとは異なる⁵⁶。さらに、現在ベスレヘムとウィンストン・セーラムに残るロゼッティのパルティアは2本のクラリネット、2本のホルンおよび1本のファゴットの5重奏であり一致しない。従って、このことから以下のことが推測できる。

1. 現在知られていない6重奏（2クラリネット、2ホルン、2ファゴット）の3曲のパルティアが存在した。
2. ベスレヘムとウィンストン・セーラムに残るパルティア RWV B8 と B9 が1798年にナザレスで演奏された楽曲である。その際、ファゴット奏者2名がファゴットパートを重複して演奏した。
3. この場合、パルティア RWV B8 と B9 以外にさらに1曲のパルティアが存在した。

5重奏であるパルティアをファゴット奏者が重複し6重奏として演奏した可能性は否定できない。当時のファゴットは音量も弱く、ディスカント楽器とバランスよく同等に響かせるためには重複演奏することは演奏習慣として頻繁に行われていた⁵⁷。また、ほとんどユニゾンの2声のファゴットパートを含むパルティアも数多く存在する。

注目すべきことにパルティア RWV B8⁵⁸ は、ベスレヘム以外に、ドイツのドナウエッシンゲン宮廷図書館⁵⁹、ポーランドのヴロツワフ大学図書館⁶⁰、チェコのプラハ・チェコ国立音楽図書館⁶¹ に筆写譜が伝えられている。このうち、ドナウエッシンゲン版は、タイトルページに Johannes Matthias Sperger ヨハネス・マティアス・シュペルガー（1750-1812）の名が後から何者かにより

書き加えられている。6楽章編成で、ロゼッティの作風とは異質のカノン風の楽章 *Presto* が挟まれている。これは明らかに別の楽譜からの筆写であると推測され、*Presto* はシュペルガーが付け加えた楽章である可能性もある。また、メヌエット楽章のクラリネットパート譜には他の版と同一のパートに加え、全く異なったパートが書き込まれており、これも作曲者以外の手によるものである可能性が高い。ヴロツワフ版は4楽章編成で、*Allegro - Largo - Menuetto - Allegro scherzando* であり、ロゼッティの多くのパルティアと同じく、古典派交響曲の形式から成り立っている。残りの2つの版、すなわちプラハ版とベスレヘム版は5楽章編成で、第3楽章 *Menuetto* と終楽章の間に *Allegro molto* が差し挟まれている。したがって、各パートの細かな相違はあるにせよ、ヴロツワフ版、プラハ版、ベスレヘム版とも第1、2、3楽章および終楽章は同一である。なお、終楽章の速度表示に、プラハ版のみ、*Allegro scherzando* に加え、*Alla Kosaca* と付加されている。

さらに、ヴロツワフ版とそれ以外の3つの版を比較すると、それぞれのパート譜では異なる箇所が多く確認され⁶²、特に第2楽章 *Largo* に関しては第41小節目以降、他の版では存在する2小節のホルンの独奏が無く、全体の小節数もそれにともない2小節少なくなっている。ヴロツワフ版の表紙には右下に *Kasch* という文字が確認できる。これは、筆写した人物が楽譜の所有者であると推測できる。また、左上には演奏日と思われる “13 Juli 08” 「08年7月13日」の書き込みがある。楽譜に使用された用紙のウォーターマークは、楕円の枠にマドンナと子供の模様で、これは18世紀後半のヴロツワフ地域の典型的なウォーターマークである⁶³。

このパルティア以外にロゼッティのパルティア Es-Dur RWV B deest がヴロツワフ大学図書館に所蔵されているが⁶⁴、この曲も RWV B8 と同様にポーランド西部で18世紀後半に製造されたと思われる用紙に筆写されている。出処が確認できるウォーターマークは2種ある。*W* の飾り文字と *BRESLAU*⁶⁵ の都市の名が使用されているウォーターマーク⁶⁶ は、1742年から1780年にヴロツワフで生産されている⁶⁷。また、*SCHWEIDNITZ* の都市名が使用された鷲をかたどったウォーターマーク⁶⁸ は、1491年以来重要な製紙の町として知られるシュヴィドニツァ

Świdnica、ドイツ名 シュヴァイドニッツ Schweidnitz のもので、この模様のウォーターマークは1763年から使用されている⁶⁹。

この2つのパルティア Es-Dur RWV 8 および RWV B deest は楽曲構成も似ており、いずれも1808年に演奏されている⁷⁰。演奏記録およびウォーターマークを考え合わせると、パルティア RWV B8 ヴロツワフ版、RWV B deest は1770年代後半以降、おそらくは18世紀末1808年までの間に筆写されたと推測できる。

次に、現在、プラハの国立音楽図書館に所蔵されているロゼッティのパルティア RWV B8 の筆写譜に関して考察を加える。この筆写譜のタイトルページには以下のような書き込みがある。右下には、

"Przibyla / Przibyla / z nového Hradcu"

ノーヴィ・フラデツのプリビュル

すなわち、ノーヴィ・フラデツ（出身）のプリビュルの所蔵を意味すると推測できる。あるいは、このプリビュル某が写譜した可能性も除外できない。また、中央下部には、

"Darem z Rychnova n[ad] kn[ěžnou] / od p[ana]

Březiny 19¹⁰/₄ 07 0. Horník"

1907年4月10日 リフノフ・ナド・クニェツノウの
ブジェズニからの贈り物として

0. ホルニーク

と記載されている。Ondřej Horník オンドジェイ・ホルニーク（1864-1917）は、作曲家、教育者、楽譜蒐集家として知られており、アントニン・ドヴォルジャークの弟子でもある。タイトルページの記述によれば、ホルニークが表記の日付にリフノフ・ナド・クニェツノウのブジェズニから譲り受け、その後この筆写譜はリフノフからプラハに移送されたと思われる。

この筆写譜のウォーターマーク⁷¹は、左側に *R*、中央部に *AB*、右側に *IDS M* (*Jesus Dominus Salvator Mundi*)⁷² と三角印に目、T型の柱に蛇が巻きついた模様で、18世紀後半に東ボヘミアで生産された用紙であることが確認できる⁷³。

R は *Rokytnice v Orlických* ロキトニーツェ・ヴ・オルリツクーフ⁷⁴、*AB* は Andreas Busel アンドレアス・ブーセルの製紙工場のイニシャルであり、右側の模様はこの製紙工場のシンボルである。当該製紙工場所有者が亡くなった後、1777年にその妻が Ondřej Busla オンドジェイ・ブースラ (Andreas Busel / Püssel アンドレアス・ブーセル/ピュッセル) と再婚し、その際に再婚相手が製紙工場を買い取るようになった⁷⁵。1803年、以前からのシンボルである三角印に目、T型の柱に蛇のウォーターマークを新調した際、*AB* (Andreas Busel) のイニシャルを付け加えた⁷⁶。製紙工場の所在地であるロキトニーツェ・ヴ・オルリツクーフ、所有者あるいは筆写した人物の居住地であるノーヴィ・フラデツ、1907年まで楽譜が保管されていたリフノフ・ナド・クニェズノウは東ボヘミアの同じ地域⁷⁷であり、この筆写譜は1803年以降の比較的早い時期に作成され、ホルニークによりプラハに移送されるまで東ボヘミアのリフノフ・ナド・クニェズノウ近郊に存在していたと推測できる。

仮にベスレヘムに伝わるロゼッティのパルティア RWV B8 が1790年代中期から後期にかけて、例えばミヒャエル、あるいはモラヴィア兄弟団信徒によってヨーロッパから移送されたとすると、プラハ版が写譜された時期よりも早くなり、プラハ版を元に写譜された可能性は無くなる。また、ベスレヘム版を元にプラハ版を写譜したことも考えにくい（ベスレヘム版がボヘミア周辺でかなり早い時期に作成され、モラヴィア兄弟団がアメリカに持ち込むまでの間に筆写されプラハ版が成立した可能性も完全には除外できないにせよ）、パルティア RWV B8 に関し、以下のような推測が成り立つ。

1. 元の楽譜は消失し、1790年代中頃までにベスレヘム版、1803年以降早い時期にプラハ版が別々に写譜された。
2. それとは別にヴロツワフ版（4楽章）があり、ベスレヘム版、プラハ版（5楽章）とは楽章編成が異なる。
3. ヴロツワフ版が筆写された年代は18世紀末以降で、遅くとも1808年であり、ベスレヘム版、プラハ版の元になったことは否定できないが、ところどころかなりの相違点が存在する。

4. ドナウエッシンゲン版（6楽章）は、シュペルガーの名前で傳承されており、これ以外の3つの版とは大きく異なる箇所がある。
5. 以上のことから、現存する版以外にも筆写譜が伝えられていた可能性もある。
6. 2本ずつのクラリネットとホルン、1本のファゴットの編成のパーティアは RWV B8 以外には B9 と RWV B deest のみである。また、これら3曲は作曲法や特徴が共通している。

ロゼッティのパーティア RWV B9 の筆写譜⁷⁸ はベスレヘムに伝えられおり、パート譜のタイトルページ⁷⁹ に “*Coll(egium) Mus(icum) zu Litiz gehörig*” とドイツ語で記入されている⁸⁰。この筆写譜は、第1クラリネットパートが紛失しており、これ以外で唯一傳承されたセーラム所蔵の筆写譜⁸¹ はファゴットパートの最初の1枚のみ⁸²、すなわちタイトルページと第1楽章のみであり、このパーティアの再演は不可能である⁸³。ただ、モラヴィア兄弟団に傳承されている2曲のパーティアがいずれも2本のクラリネット、2本のホルン、1本のファゴットの編成であり、様式、形式ともに類似し、ミヒャエルらの取り上げたパーティアとも共通する特徴を持つことは非常に興味深い。

総括

アメリカ東部のペンシルヴァニア、ノース・カロライナにはモラヴィア兄弟団の信徒が18世紀中頃に入殖した町があり、そこではそれ以降とりわけ19世紀前半に豊かな音楽活動が行われていた。特に、管楽アンサンブル、ハルモニウムジークに関しては、ドイツから派遣された音楽家、ダーヴィド・モーリツ・ミヒャエルが中心となり、ベスレヘム、ナザレスでは同地のコレギウム・ムジクムにより数多くの演奏会が行なわれ、ヨーロッパからもたらされた楽曲が頻繁に演奏されていた。中でもピヒル、マシエクの作品は好まれ、18世紀後半、ヨーロッパ全土で知られていたロゼッティの楽曲はこれらの入殖地以外でも演奏されていた記録が残っている。その中で管楽アンサンブルに関してはパーティアRWV B8 と B9 のみがベスレヘムとセーラムに現存している。パーティア RWV B8 は、これ以外に、ブラハ、ヴロツワフ、ドナウエッシンゲンに筆写譜が現存しており、ベスレヘム版とブラハ版はほぼ同一である。

今後、ベスレヘムに所蔵されている筆写譜、とりわけその紙質、ウォーターマークなどを資料研究することにより、この楽譜のアメリカへの傳承方法、あるいはそれぞれの版の関係がより明確になり、19世紀初頭のアメリカにおけるヨーロッパの管楽アンサンブルの導入と受容の歴史が明らかになることが期待される。

参考文献

- Claypool**, Richard D.: "Archival Collection of the Moravian Music Foundation and some notes on the Philharmonic Society of Bethlehem", in: *Fontes Artis Musicae*, Vol. XXIII/4, Kassel 1976
- Crews**, C. Daniel: *Moravian Composers - Paragraph Biographies*, Winston-Salem 1999
- Einender**, Georg: *The ancient paper-mills of the former Austro-Hungarian Empire and their watermarks*, Hilversum/Holland 1960
- Ellsworth**, Jane Elizabeth: *The clarinet in early america, 1758-1820*, The Degree Doctor of Philosophy in the Graduate School of The Ohio State University, Ohio 2004
- Grider**, Rufus A.: *Historical Notes on Music in Bethlehem, Pennsylvania From 1741-1871*, Philadelphia 1873, rep. Moravian Musik Publications no. 4, Winston-Salem 1957
- Ichikawa**, Katsuaki: *Die Harmoniemusik am Hof von Oettingen-Wallerstein unter besonderer Berücksichtigung der Werke Antonio Rosettis*, Halle 2014
- Kaul**, Oskar: *Denkmäler der Tonkunst in Bayern XII/1, Anton Rosetti, Ausgewählte Sinfonien*, Leipzig 1912
- Knouse**, Nola Reed: *Moravian Music: An Introduction*, Winston-Salem 1996
- Knouse**, Nola Reed: *Moravian Music Foundation und brüderische Musikforschung in Amerika*, in: *Unitas Fratrum*, Heft 47, Herrnhut 2001
- Maleszyńska**, Kazimiera: *Dzieje starego papiernictwa Śląskiego*, Wrocław 1964
- McCorkle**, Donald M.: "The Collegium Musicum Salem, its Music, Musicians and Importance", in: *The North Carolina Historical Review*, Vol. 33, No. 4, Winston-Salem 1956
- Menzel**, Gerd: *Herrnhut zur Zinzendorfzeit*, Herrnhut 2001
- Murray**, Sterling E.: *The Music of Antonio Rosetti, Thematic Catalog*, Michigan 1996
- Tschernig**, Renate: *Frühe Kammermusik in Nordamerika und ihr Ursprung in den Musizierformen der Herrnhuter Brüder in den deutsch-amerikanischen Gemeinden*, 1. Staatsprüfung für das Amt des Studienrats, schriftliche Hausarbeit, Berlin 1964⁸⁴
- Zuman**, František: *České Filigrány XVIII. Století*, Praha, 1932

- ¹ *Herrnhut*、「主の守り」の意。
- ² チェコ語では *Moravští bratři*、モラヴィア地方の「兄弟団」信徒たちのこと。本稿ではアメリカに移住した信徒たちの意味として用いている。
- ³ 19世紀の北アメリカ東部において、アントニオ・ロゼッティの作品は比較的演奏されていたが、モラヴィア兄弟団による演奏はそのごく初期のものであり、ロゼッティ没後間もなく、急速にその作品は広まったようである。
- ⁴ ラテン語、「同志の統一」の意、ドイツ語では *Brüderunität*、ボヘミア兄弟団と訳される。
- ⁵ 現ドイツ連邦共和国ザクセン州の南東部、チェコとの国境近く、オーバー・ラウジッツ地方、現在でも兄弟団の中心地として活動を行い所属の公文書館には数世紀にわたる貴重な書籍、楽譜などが所蔵されている。
- ⁶ Gerd Menzel, *Herrnhut zur Zinzendorfzeit*, Herrnhut 2001, p. 12
- ⁷ 第2節「*Collegium musicum* と管楽アンサンブル」参照。
- ⁸ Martin Geck, “*Brüdergemeinen*”, MGG, Sachteil 2, Kassel 1995, Sp. 174-175
- ⁹ Nola Reed Knouse, *Moravian Music: An Introduction*, Winston-Salem 1996, p. 1
- ¹⁰ 現ウィンストン・セーラム Winston-Salem, 1913年、セーラムとウィンストンが合併して現在の名称となった。
- ¹¹ Richard D. Claypool, “*Archival Collection of the Moravian Music Foundation and some notes on the Philharmonic Society of Bethlehem*”, in: *Fontes Artis Musicae*, Vol. XXIII/4, Kassel 1976, p. 178
- ¹² *Moravian Music Foundation, Archives of the Moravian Church* に関しては、Nola Reed Knouse, *Moravian Music Foundation und brüderische Musikforschung in Amerika*, in: *Unitas Fratrum*, Heft 47, Herrnhut 2001, pp. 121-127, および Claypool, p. 177-190 で報告されている。
- ¹³ 同上
- ¹⁴ Claypool, p. 180
- ¹⁵ ニューグローブ音楽大事典第7巻, 講談社 1994, p. 116
- ¹⁶ 前掲, p. 117
- ¹⁷ Jane Elizabeth Ellsworth, *The clarinet in early america, 1758-1820*, 博士論文, The Degree Doctor of Philosophy in the Graduate School of The Ohio State University, Ohio 2004, p. 73
- ¹⁸ 前掲, p. 74
- ¹⁹ Knouse, p. 19
- ²⁰ Rufus A. Grider, *Historical Notes on Music in Bethlehem, Pennsylvania From 1741-1871*, Philadelphia 1873, rep. *Moravian Musik Publications* no. 4, Winston-Salem 1957, p. 5
- ²¹ 同上
- ²² 前掲, pp. 24-25
- ²³ Grider, p. 27, Claypool, p. 187
- ²⁴ Grider, p. 28
- ²⁵ 同上
- ²⁶ C. Daniel Crews, *Moravian Composers - Paragraph Biographies*, Winston-Salem 1999, p. 8
- ²⁷ Donald M. McCorkle, “*The Collegium Musicum Salem, its Music, Musicians and Importance*”, in: *The North Carolina Historical Review*, Vol. 33, No. 4, Winston-Salem 1956, p. 493
- ²⁸ McCorkle, p. 493
- ²⁹ 正確な名称は *Bestimmt zu einer Wasserfahrt auf der Lecha*
- ³⁰ Whit-Sunday の翌日、Whit-Sunday は聖霊降臨祭（復活祭）後の第7日曜日。
- ³¹ Grider, p. 9
- ³² Grider, p. 10
- ³³ Ellsworth, p. 70
- ³⁴ Renate Tschernig, *Frühe Kammermusik in Nordamerika und ihr Ursprung in den Musizierformen der Herrnhuter Brüder in den deutsch-amerikanischen Gemeinden*, 1. Staatsprüfung für das Amt des Studienrats, schriftliche Hausarbeit, Berlin 1964, p. 42
- ³⁵ 前掲, p. 63
- ³⁶ アダルベルト・マティアス・ギロヴェッツ Adalbert Gyrowetz
- ³⁷ おそらくは Anton Zimmermann (1741-1781)。
- ³⁸ Collauf という記載のみで名および生没年は不明。
- ³⁹ Noak という記載のみで名および生没年は不明。
- ⁴⁰ Ellsworth, pp. 65-71

- ⁴¹ 前掲, p. 72
- ⁴² Ellsworth, pp. 65-71
- ⁴³ Ellsworth, pp. 69-71
- ⁴⁴ Grider, p. 9
- ⁴⁵ 前掲, p. 80
- ⁴⁶ Ellsworth, pp. 80-81
- ⁴⁷ ヴォレは西インド諸島のセント・トーマス島生まれで、モラヴィア兄弟団の宣教師であった両親とともに3歳の時にペンシルヴァニアに移住した司教、音楽家で、ナザレスとセーラムで教師として、後に司教となり、ベスレヘムで亡くなった。子孫、親族に音楽家があり、特にカリフォルニア大学パークレー校音楽学科長となった甥の息子ジョン・フレッドは、ベスレヘム・バッハ合唱団を創立、また1900年にバッハのミサ曲口短調のアメリカ初演を行うなど重要な活動を行った。
- ⁴⁸ Ellsworth, p. 81
- ⁴⁹ McCorkle, p. 489
- ⁵⁰ トランペットの前身、マウスピースと縦に伸びた管からなり指孔を用いて音程を変える。
- ⁵¹ 同上
- ⁵² *US-WS: SCM 376, Partia ex Es Toni / A Duoi Clarinetti: / Duoi Corni et / Fagotto del Sig. Rosetti:*
- ⁵³ Sterling E. Murray, *The Music of Antonio Rosetti, Thematic Catalog*, Michigan 1996, p. 131
- ⁵⁴ Heinrich Philipp Carl Bossler, *Musikalische Korrespondenz der Deutschen Filharmonischen Gesellschaft Mittwochs den 4ten Jan. 1792, Numero I, Speier 1792*, Sp. 3, Oskar Kaul, *Denkmäler der Tonkunst in Bayern XII/1, Anton Rosetti, Ausgewählte Sinfonien*, Leipzig 1912, p. XXXIII
- ⁵⁵ Ellsworth, pp. 65-71
- ⁵⁶ ロゼッティ作品目録に含まれる6声のパルティアは全てドナウエッシンゲン宮廷図書館（現在はカールスルーエのバーデン・ヴュルテンベルク州立図書館）に所蔵されている。
- ⁵⁷ Katsuaki Ichikawa, *Die Harmoniemusik am Hof von Oettingen-Wallerstein unter besonderer Berücksichtigung der Werke Antonio Rosettis*, 博士論文 Halle 2014, p. 172
- ⁵⁸ *US-BETm: PSB 1357.5*
- ⁵⁹ *D-DO: Mus. ms. 1830*
- ⁶⁰ *PL-Wru: Ia 18 (60221 Muz.)*
- ⁶¹ *CZ-Pnm (Rychnov and Kněžnou): XIV E 58*
- ⁶² Ichikawa, p. 336ff.
- ⁶³ Kazimiera Maleszyńska, *Dzieje starego papiernictwa Śląskiego* (古いシュレジエンの製紙工場), Wrocław 1964, p. 164
- ⁶⁴ *PL-Wru: Ia 16 (60163 Muz.)*
- ⁶⁵ Breslau プレスラウ、現 Wrocław ヴロツワフ
- ⁶⁶ 巻末画像資料1参照。
- ⁶⁷ Maleszyńska, p. 174
- ⁶⁸ 巻末画像資料2参照。
- ⁶⁹ 前掲, p. 171
- ⁷⁰ Ichikawa, p. 137
- ⁷¹ 巻末画像資料3参照。
- ⁷² 「主イエス、世の救い主」の意。
- ⁷³ František Zuman, *České Filigrány XVIII. Století*, Praha, 1932, p. TAB XLIII
- ⁷⁴ Georg Einender, *The ancient paper-mills of the former Austro-Hungarian Empire and their watermarks*, Hilversum/Holland 1960, p. 112
- ⁷⁵ Zuman, p. 25
- ⁷⁶ 同上
- ⁷⁷ リフノフ・ナド・クニェズノウの西約30kmにノーヴィ・フラデツが、東約15kmにロキトニーツェ・ヴ・オルリツクーフが位置する。
- ⁷⁸ *US-BETm: PSB/1351.5*
- ⁷⁹ 巻末画像資料4参照。
- ⁸⁰ Ichikawa, p. 28, p. 142
- ⁸¹ *US-WS: SCM 376*
- ⁸² Ichikawa, p. 143
- ⁸³ 本稿筆者により新たに第1クラリネットが再構成された。Ichikawa, 付録 p. 66

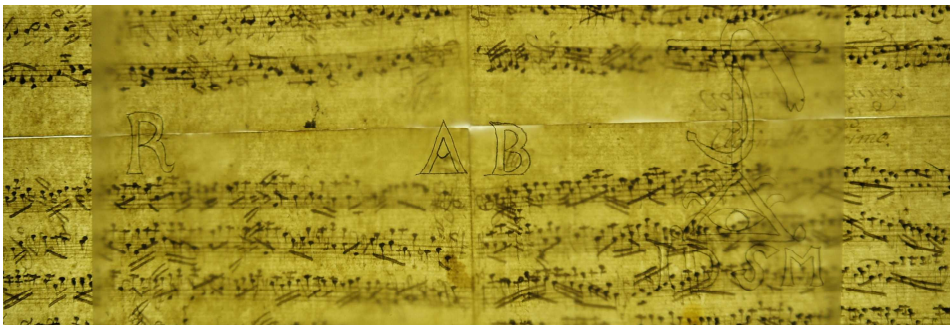
画像資料 1 : Antonio Rosetti Parthia Es-Dur RWV B deest, *PL-Wru: Ia 16 (60163 Muz.)*, ウォーターマーク



画像資料 2 : Antonio Rosetti Parthia Es-Dur RWV B deest, *PL-Wru: Ia 16 (60163 Muz.)*, ウォーターマーク



画像資料 3 : Antonio Rosetti: Parthia Es-Dur RWV B8, *CZ-Pnm (Rychnov and Kněžnou) : XIV E 58*, ウォーターマーク



画像資料 4 : Antonio Rosetti, Es-Dur RWV B9, *US-BETm: PSB 1357.5*, タイトルページ
"Parthia 2 Clarinetti. / 2 Corni. / Fagotto."

